

三 次の文章を読んで、問い合わせに答えよ。

(頭中将に仕える小舎人童と恋仲になつた女童は、故式部卿宮の姫君に仕えていた。)

この女童、いかになりにけむ、うせたまひにし式部卿宮の姫君の中になむ候ひける。宮など、とく隠れたまひにしかば、心細く思ひなげきつつ、八条わたりに、人少なにて過ぐしたまふ。上は、宮のうせたまひける折、⁽⁷⁾さま変へたまひにけり。姫君の御かたち、例のことと言ひながら、なべてならず、ねびまさりたまへば、「いかにせまし、内裏⁽⁸⁾などに思し定めたりしを。今は、かひなく」など、思しなげくべし。

小舎人童、八条の宮に来つつ見ることに、たのもしげなく、宮の内もさびしくすげなるけしきを見て、語らふ。「まろが君を、この宮に通はしてまつら A」。まだ定めたるかたもなくておはしますに、いかによからむ。程遙⁽⁹⁾かになれば、思ふままにも参らねば、おろかなるとも思すらむ。また、いかにとうしろめたき心地も添へて、さまさま安⁽¹⁰⁾げなきを」と言へば、「さらに今は、さやうのことも、思しのたまはせすとこそ聞けば」と言ふ。「御かたち、めでたくおはしますらむや。いみじき御子たちなりとも、飽かぬところおはしまさむは、いとくちをしからむ」と言へば、「あなあさまし。いかでか。見たてまつらむ人々ののたまふは B よろづむつかしきも、御前に C 参れば、慰みぬべし」と C のたまへ」と語らひて、明けぬれば、往ぬ。

かくいふほどに、年もかへりにけり。君の御方に若くて候ふ男、好ましきにやあらむ、定めたるところもなくて、この童に言ふ。「その、通ふらむところは、いづくぞ。さりぬべからむや」と言へば、「八条の宮になむ。知りたるもの候ふめれども、ことに若人あまた候ふまじ。ただ、中将、侍従の君などいふ D、かたちもよげなりと聞きはべる」と言ふ。「さらば、そのしるべして、伝へさせよ」とて、文取らすれば、「はかなの御懸想⁽¹¹⁾かな」と言ひて、持て行きて、取らすれば、「あやしのことや」と言ひて、持てのぼりて、「しかじかの人」とて見す。手も清げなり。柳につけて、

「したにのみ思ひみだるる青柳⁽¹²⁾のかたよる風はほのめかさずや知らずは、いかに」とあり。

「御返事ながらむは、いと古めかしからむ。今やう様は、なかなか初めのをぞしたまふなる」などぞ笑ひて、もどかす。少し今めかしき人にや、

（ア） ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつつさぞみだるらむ

今やうの手の、かどあるに書きみだりたれば、をかしと思ふにや、まもらへて居たるを、君見たまひて、後ろより、にはかに奪ひ取りたまひつる。

「誰がぞ」と抓つかみ捻ひねり、問ひたまへり。「しかじかの人のもとになむ。なほざりにやはべる」と聞こゆ。われも、いかでさるべからむたよりもがな、と思すあたりなれば、目めとまりて見たまふ。「同じくは、ねんごろに言ひおもむけよ。物のたよりもせむ」などのたまふ。

童を召して、ありさまくはしく問はせたまふ。ありのままに、心細げなるありさまを語らひきゆれば、「あはれ、故宮のおはせましかば」。さるべき折はまうでつつ見しにも、よろづ思ひ合はせられたまひて、わが身も、はかなく思ひつづけられたまふ。

（イ） いとど世もあぢきなくおほえたまへど、また、いかなる心のみだれにがあらむとのみ、常にもよほしたまひつつ、歌などよみて、問はせたまふべし。

注 八条わたり（ア） 平安京南部のさびれた地域。

八条の宮（イ） 式部卿宮の遺族が住んでいる邸宅。

上（ア） 式部卿宮の妻で姫君の母。

若人（イ） 若い女房。

中将（ア） 侍従の君（イ） 女房の名。

「知らずは、いかに」（ア） 「知るや君知らずはいかにつらからむ我がかくばかり思ふ心を」（『拾遺和歌集』）による。

（『堤中納言物語』による）

問1 傍線アの「さま変へたまひにけり」、イの「よろづむつかしき」を、それぞれ十二字以内で現代語訳せよ。

問2

A 、 B 、 C 、 D

マーカせよ。ただし、同じ選択肢を複数回使うことはできない。

1 なむ 2 たし 3 さへ 4 ばや 5 だに 6 こそ

問3

傍線①の「安げなき」とは、小舎人童のどのような気持ちか。最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマーカせよ。

- 1 頭中将がいつまでも定まつた相手もなく、独り身であることを、身分柄ふさわしくないと心配する気持ち
- 2 父親を失い、頼る人もいない式部卿宮の姫君が、ふさわしい相手と結婚できるだろうかと心配する気持ち
- 3 八条の宮までは遠く、思うように通えないと心配する気持ち
- 4 八条の宮は手入れをする人もなく、邸内も次第に荒れてきたため、女童も不安ではないかと心配する気持ち
- 5 頭中将が式部卿宮の姫君のもとに通うようになつたとしても、それが長続きするだろうかと心配する気持ち

問4

- 1 傍線①～⑤のそれぞれの文法的説明として、正しいものを、次のなかから一つ選び、その番号をマーカせよ。
 - 1 ①の「おはします」は謙譲語で、小舎人童から頭中将に対する敬意を表す。
 - 2 ②の「たてまつら」は謙譲語で、女童から式部卿宮の姫君に対する敬意を表す。
 - 3 ③の「のたまへ」は尊敬語で、女童から式部卿宮の姫君に対する敬意を表す。
 - 4 ④の「候ふ」は丁寧語で、小舎人童から女童に対する敬意を表す。
 - 5 ⑤の「はべる」は丁寧語で、小舎人童から中将・侍従の君に対する敬意を表す。

問5

傍線①の「したにのみ思ひみだるる青柳のかたよる風はほのめかさずや」、②の「ひとすぢに思ひもよらぬ青柳は風につけつつさぞみだるらむ」の和歌の贈答の説明として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 八条の宮の女房たちへの思いを今まで伝えられなかつた苦しさを嘆く男に対し、思うにまかせない恋はさぞかしつらかつただろうと同情を寄せた返事をしている。

- 八条の宮の寂しい暮らしぶりを聞き密かに心を痛めていると伝えた男に対し、思いがけない人から慰めの言葉をもらつたと感謝の気持ちを込めた返事をしている。

- 八条の宮の女房たちのことを密かに恋い慕つていると訴える男に対し、浮氣な男はいろいろな女の噂うわさを聞くたびに心を動かすのだろうと皮肉つた返事をしている。

- 式部卿宮の姫君への身分違いの恋に苦しんでいると訴える男に対し、姫君は一時の浮氣心で言い寄つてよい相手ではないと非難する思いを込めた返事をしている。

- 八条の宮を去つて別の屋敷に仕えることを勧める男に対し、宮家への忠義、心に欠ける者ならば迷いもするだろうが自分に迷いはないと拒絕する返事をしている。

問6

傍線③の「目とまりて見たまふ」の理由として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 式部卿宮の姫君に言い寄るつではないものかと、常々思つていたから
- 交際の途絶えた八条の宮から手紙が届いたことを、不審に思つたから
- 式部卿宮の姫君に仕える女房たちの教養を、確かめたいと思つたから
- 式部卿宮の死後間もないのに恋文を送るのは、不謹慎だと思つたから
- 男から取り上げた手紙の筆跡が美しく、和歌も優れていると思つたから

問7 傍線❶の「いとど世もあぢきなくおぼえたまへど」の理由として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 八条の宮の寂しい様子を聞き、宮家の生活を助けようとする人がいないことを、情けないとと思ったから
- 2 男からの突然の手紙に対し、すぐに返事を送つてきた八条の宮の女房の軽薄さに、失望させられたから
- 3 式部卿宮の姫君に仕える女房の手紙から、姫君の人柄も推測され、期待したほどではないと思われたから
- 4 八条の宮の寂しい様子を聞くにつけ、式部卿宮の生前の宮家のことが思い出され、世の無常を感じたから
- 5 八条の宮の寂しい暮らしぶりから、姫君との結婚を望んでも、周囲の者から反対されるだろうと思ったから

問8 本文の内容に合うものを、次のなかから二つ選び、その番号をマークせよ。

- 1 式部卿宮の遺志に従い、姫君を内裏に仕えさせよという帝からの命令に対し、姫君の母や女房たちは困惑していた。
- 2 小舎人童は頭中将を式部卿宮の姫君に通わせることを提案したが、姫君は今その心境にならないらしいと、女童は答えた。
- 3 小舎人童が帝の御子たちの容貌に物足りなさを感じると言つたことに対し、女童はあきれた物言いだと強く叱責した。
- 4 八条の宮の女房たちは、最初に送られてきた手紙に返事をしないのは現代風で失礼にあたるからと、男に返事を送つた。
- 5 男が八条の宮の女房と手紙を取り交わしていることを知つた頭中将は、今後も熱心に手紙を送り口説くよう命じた。
- 6 式部卿宮の姫君に心を引かれた頭中将だつたが、それも一時の気の迷いと思つて自重し、特に行動は起こさなかつた。

四 次の文章を読んで、問い合わせに答えよ（設問の都合上、訓点を省略した部分がある）。

陳 恭 隠 隠 居 山 中 以 咎 飲 自 縦 不 下 与 時 人 通 上 牝 犬 隨 恭
隱 未 嘗 須 眇 離 每 出 則 犬 先 行 数 百 步 二 以 為 斯 導 者
遇 豺 狼 蛇 虎 則 驅 返 嘘 恭 隱 衣 袂 叟 之 還 二 以 為 斯 導 者
恭 隱 悟 即 旋 犬 又 隨 後 離 数 十 步 作 大 声 噴 二 以 為 斯 衛 者
者 以 是 為 常 夜 則 於 爬 前 後 巡 且 呛 達 旦 不 少 休 二 以 為 斯 衛 者
數 年 犬 一 乳 五 子 皆 牡 既 長 恭 隱 分 贈 前 後 左 右 隣 家
畜 皆 能 司 門 戸 不 怠 初 分 之 歲 余 母 犬 日 往 各 家 視 乳
犬 一 周 下 訓 之 勤 者 有 食 乳 犬 輒 讓 母 犬 食 乳 犬 既 壮
母 犬 即 不 往 視 而 乳 犬 每 早 輒 斥 來 恭 隱 家 視 母 犬
A

又タ
数年、母犬病レ癩、瘦セテ
母犬日齊來争与ニ
母犬舐レ癩、ヲ

遂癒、毎レ至ル
元旦、五乳犬輒齊來遶二
母犬一搖尾、
下為ニ母犬ノ

A

賀歲、状上後母犬死スルニ
五乳犬皆哀号シテ不レ止、恭隱憫レ之、瘞之、

後山、五乳犬毎レ早輒齊往瘞ムルニ
號シテ如レ是者數年不輒。

（『虞初新志』による）

注 独狼ニやまいぬとおおかみ。

廬舍ニ住居。

乳ニ子を産む。

歲余ニ一年余り。

乳犬ニ子犬。

癩ニ皮膚病。

問1 傍線①の「以是」、②の「旦」の読み方を、送りがなを含めて、それぞれひらがなで書け。現代仮名遣いを用いてもよい。
問2 □Aにはすべて同じ一字が入る。最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 非 2 於 3 盡 4 宜 5 肯 6 若

問3 傍線③の「恭隠分贈前後左右隣家畜皆能司門戸不怠」の書き下し文として、最も適当なものを、次のなかから選び、その番号をマークせよ。

- 1 恭隠分けて前後左右に贈り、隣家も畜ひて、皆な能く司りて門戸は怠らず
 - 2 恭隠分けて前後左右の隣家の畜を贈り、皆な能ありて門戸の怠らざるを司る
 - 3 恭隠分けて前後左右の隣家に贈りて畜はしむるに、皆な能く門戸を司りて怠らず
 - 4 恭隠前後左右に分け贈り、隣家畜へば皆な能く門戸の怠らざるを司る
 - 5 恭隠前後左右の隣家に分け贈るに、畜は皆な能く門を司りて戸に怠らず
 - 6 恭隠前後左右の隣家の畜の皆な能く司るを分け贈り、門戸に怠らざらしむ
- 問4 本文の内容に合うものを、次のなかから一つ選び、その番号をマークせよ。
- 1 陳恭隠と暮らしていた牝犬は、陳恭隠が外出するといつも先導したり、危険を知らせたりして付き従い、夜には恭隠と一緒に休んで片時も離れずにいた。
 - 2 陳恭隠が飼っていた牝犬は数年後に五匹の子犬を産み、子犬たちはみな近隣の家にもらわれたが、母犬が恋しくて大きくなるまでは元の家に毎朝帰っていた。
 - 3 五匹の子犬たちが近隣の家にもらわれた後も、母犬は毎日子犬たちの家に行つて見守り、子犬たちが成長するまでは自分の食料を分け与え続けていた。
 - 4 子犬たちは成長後、恭隠の家に毎朝やつてきて母犬に会い、数年後に母犬が皮膚病になった時には、子犬たちはその患部を舐めて母犬の病気を治した。
 - 5 母犬が死ぬと、子犬たちはみな悲しげになっていたが、陳恭隠が彼らを憐れんで後方の山に母犬の墓を作ると、子犬たちは墓のそばで静かに伏せていた。